

ごみの無い社会は自然との共生で

兵庫県民生活部環境局
環境整備課 主幹 岡崎俊忠

ニューギニア北部アイタペ沖大津波がきっかけで、社大阪南太平洋協会の仲間と、被災地に近い人口およそ200人ほどの小さな、集落であるソワム村を訪ねた。

私自身、阪神淡路大震災の体験などもあり、取りあえず身の回りにあるもので、その場を凌ぐということではそれなりの自信もあったが、ほんの数日間とは言え、上水道（井戸）もガスも、もちろん電気もないところで本当に生きていけるのかという一抹の不安を拭い去ることはできなかった。

しかし、現地に着くと底抜けに明るい村人が、まるで祭りのような雰囲気であれわれを迎えてくれ、それまでの不安と緊張は一気に吹っ飛んでしまった。

ソワムでは、大人はもちろん小学生ぐらいの子供まで、すべての人が何時でも何処でも、刃渡り40～70センチの（まるで日本刀みたいな）ブッシュナイフを身に付けており、ノコギリやナタ、あるいは包丁などとして利用している。

この地域では、このブッシュナイフは、いろいろな生活用品を作る木や食糧であるヤシの実などをジャングルの中から得るための道具であり、これを自由に扱えない者は生きていけないし、まして男の場合、一人前には扱ってもらえないようだ。



ブッシュナイフを持つ人たち

ソワムの人たちは、われわれから見ると丸裸の状態、まるで町中の公園を散歩するようにジャングルを歩き回り、生活に必要なものをジャングルから得ている。テントを持ち歩かなくても、身の回りにある自然の材料を利用して住まいを造り、インスタント食品や缶詰を持ち歩かなくても、腹が減ったらその場で水も食糧も確保する。帽子も靴も、もちろんレインコートや傘など何もいらぬ。暑さんが苦しめないし、服を着なくても一向に気にならない。

ここでは犬も鶏もほとんど野生に近い状態にあり、人の生き方も自然と一体である。

鶏は朝4時過ぎに第一声を発し、5時にもなれば喧しくてとても寝てられない。明るくなるまでは鶏の鳴き声のほかは、ほとんど物音が聞こえないので定かではないが、夜明けとともに、人々の活動が始まるようだ。

われわれと違って時計を頼りに生活する習慣がないので、時間ではなく、一つのことが終われば次のことに取り掛かるといった生活の進め方が一般的である。何かを予定していても雨が降ればできなくなるし、日が沈めば何の明かりもないので思い通りの活動はできない。計画を立てて時間通りに物事を片付ける必要はなく、毎日の生活はすべて自然の流れに任せてある。

トイレがない、上水道（井戸）もガスも、もちろん電気もない生活と聞けば、私たち日本人は耐え難いほど不便な生活を想像するが、村人には略さなどみじんもない。顔を合わせれば明るくあいさつし、われわれが何か戸惑っていたり、聞いたりと大勢集まってきて親切に手伝い、教えてくれる。

便利な生活に慣れているわれわれでも、着いたその日から別に不自由を感じることはないし、クーラーやシャワーがほしいとも感じないのが不思議である。

さて、ごみの話であるが、現地にいる間、ごみらしいごみと言えば、われわれが持ち込んだ食糧や身の回りの持ち物を入れた容器類だけである。

食程をはじめ、身の回りのすべてのものを自然の中から手に入れるので、基本にごみは発生しない。ヤシの実を取った殻は立派な燃料になるなど、自然にあるものをそのまま利用すれば、すべてが食程や燃料や肥料になってしまう。おかげで紙くずなど、目障りになるごみは全く落ちていないので、とにかくきれいだ。

自然と共存すれば、ごみの発生する余地がないことを身をもって体験し、今、我が国で盛んに言われている「資源環境型社会」の原点を教えられたような気がする。

われわれは、彼らに、津波に耐えられる家の建て方や、簡単な怪我の治療法などを学んでもらうために行ったのであるが、ごみをいかに減らし、リサイクルをどうして進めていくかという仕事をしている私には、他では得ることのできない重要なことを学ぶことができた。

今後とも機会があれば、彼らがもう少し便利で、健康的な生活をできるように支援しながら、私も彼らからいろいろなことを学んでいきたい。

（おかげさ としただ）